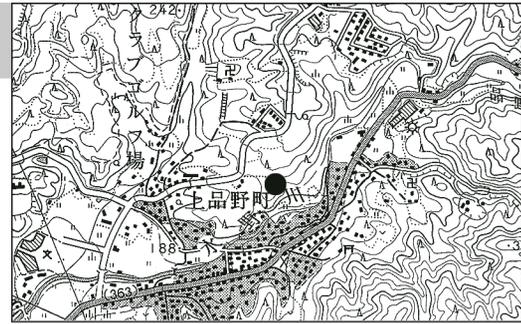


くわしたひがし
桑下東窯跡

所在地 瀬戸市上品野町地内
(北緯35度15分25秒 東経137度8分33秒)
調査理由 国道363号改良
調査期間 平成17年9月～平成18年3月
調査面積 4,726㎡
担当者 小澤一弘・鶴飼雅弘



調査地点 (1/2.5万「多治見」)

調査の経過 本遺跡の調査は、国道363号の改良工事に伴う事前調査として、愛知県建設部道路建設課より愛知県教育委員会を通じた委託事業として、平成17年9月から平成18年3月にかけて実施した。調査面積は4,726㎡である。

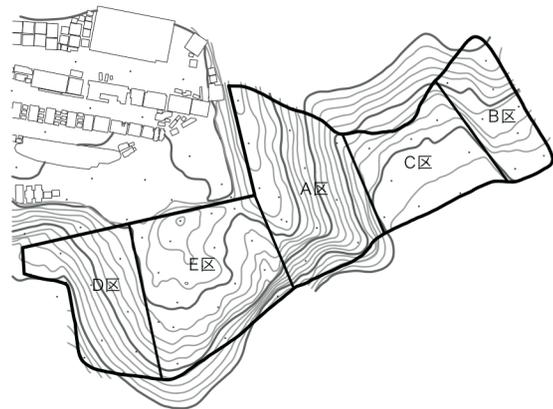
立地と環境 本遺跡は品野盆地の北東、水野川北岸の丘陵上標高220mに立地する。遺跡の西には桑下城跡、東には西金地遺跡が隣接する。また水野川の対岸標高300mの丘陵上には、品野城跡が立地する。

調査の概要 調査区は着手した順番でA区からE区に区別した。以下、調査により明らかになった成果を、調査区ごとに紹介する。

A 区 調査区東側の平坦面及び高低差を持つ斜面を範囲とする。表土直下で作業場SX01を検出した。SX01は南北13m、東西10mの範囲に及び、南端には南北2群の石敷が見られる。うち北寄りの一群は東側へ傾斜し、周囲からは挟み皿が集中して出土した。石敷の東側は急傾斜となるが灰層状の堆積が見られ、搦鉢・端反皿・匣鉢等が集中して出土した。SX01を拡張するため斜面に盛土を施し、更に盛土の平坦部を維持するために石敷を敷設したと考えられる。

石敷周辺では精製された粘土の散布がみられたため、更に掘削して遺構を確認したところ、ロクロピット40基を検出した。ロクロピットは大別すると、A) 平面形態が円形で、粘土が充填されたもの、B) 平面形態が円形で、拳よりやや小さい石で軸周りを固めたもの、C) 土坑状の楕円形の平面形態で、埋土が地山と同じ茶褐色、中程から粘土混じりの土で軸周りを固めたもの、に分類可能である。これらロクロピットの間には相互に切り合いを持つものもみられ、石組井戸のように石を周りに巡らせたもの、焼台に穴をあけたもの等もみられた。このほか方形の土坑が確認された。SX01より北では遺構は確認されていないが、表土直下から狛犬の胴部が1個体出土した。

B 区 B区 調査区の東端にあたり、西金地遺跡に隣接する。斜面を南向きに削り、平坦面を4段つくる。このうち最上段および2段目の平坦面では集石を検出し、下部から土壇墓が検出された。また最上段の土壇墓の周囲では排水溝SD24を確認した。出土遺物は大窯の年代観を示すことから、窯とほぼ同時期の構築が考えられる。2段目にある方形の土壇墓



調査区の配置

SK12は、出土遺物から17世紀半ばの構築と考えられる。SK12の西4mでは石囲いの溜井戸SE01を検出し。遺構からは近世の徳利、柳茶碗等が出土した。残る下の2段は、後世の耕地造成の影響を受けていたものの、堅穴状の遺構SK02を確認した。SK02は半分以上を削られているものの、壁面は強く被熱している。遺物は播鉢が出土しているが、あるいは小窯に類するものの可能性がある。

- C 区 A区とB区にはさまれた、谷間の調査区である。谷の東寄りには自然流路と化しているものの、調査区西寄りでは多数の柱穴・土坑・区画溝を確認した。このうち土坑SK21からは、炭化物を多く含む埋土と拳大の石が出土した。形態から火葬墓と考えられる。また柱穴の中には打ち込み柱が多く見られ、P105では柱とともに礎板が出土している。出土遺物は火葬の年代観を持つものが多く、完品が比較的多い事も特徴である。このほか漆椀・箸・木製の鋤・銅製金具などが出土している。谷の埋没後は水田として利用されていたが、出土遺物からは近世中期以降の開墾が想定される。
- D 区 調査区の西端、西に傾斜する斜面及び谷の部分である。その西に桑下城跡が隣接する。明確な遺構は確認できなかったが、谷に堆積する赤色土から手水鉢が1個体出土した。その下層の白色粘土層からは匣鉢片が出土したが、崩落の危険が予想されたため、トレンチによる確認に留めた。
- E 区 窯体SY01およびその西に展開する平坦部をさす。SY01は窯体の床面及び壁面の一部が残存しているものの、窯体右側は既に流失していた。中軸線はほぼ南北方向、残存長は約2.4m、燃焼室の幅は約2m、焼成室床面の傾斜は約26°である。燃焼室には小分焰柱が、焼成室には分焰柱および支柱の痕跡がある。

SY01の西側では作業場が確認された。作業場は調査区の大半で連続して展開しており、



主要遺構配置図(1:200)

斜面では基盤岩を掘削し平坦面を確保している。また末端部では粘土が混じった土を貼り、補強している。このうちSX02は方形のプランを持ち、壁際に排水溝を施す。またSX03の南端ではロクロピット及び方形の土坑が確認された。丘陵の頂部には掘立柱建物SB01が検出された。(鶴飼雅弘)

ま と め 桑下東窯跡の調査では新たな発見が相次いだ。第1はA区のロクロピット群である。約50㎡の範囲から63基を検出した。またE区でも3基を検出した。第2には丘陵全体に土木事業が施され、窯体の周辺には石敷、竪穴状作業場、住居跡もしくは作業施設、縁辺部には盛り土がみられ、大規模な作業空間を造成していた事である。第3にはC区の谷の柱穴群とB区の土壙墓である。今まで見過ごされていた谷部より遺構を検出した事により、今後の窯跡の調査に一石を投じる事となった。出土遺物の大半は匣鉢と挟み皿の窯道具である。製品としては天目茶碗、灰釉丸碗、端反皿、搦鉢が多くみられるが、狛犬、魚型掛け花生、燭台なども出土している。(小澤一弘)



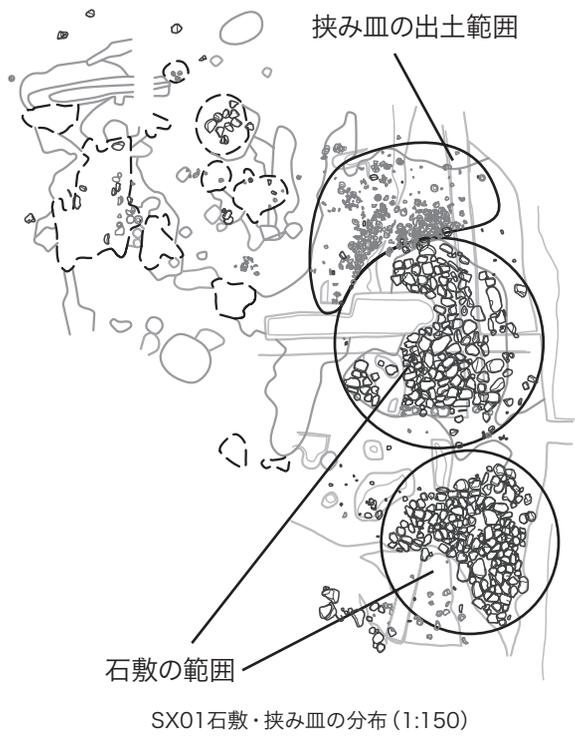
A区ロクロピット



A区出土狛犬



A区石敷検出状況



SX01 狭み皿



SK09 完掘状況



B区 SK02出土状況



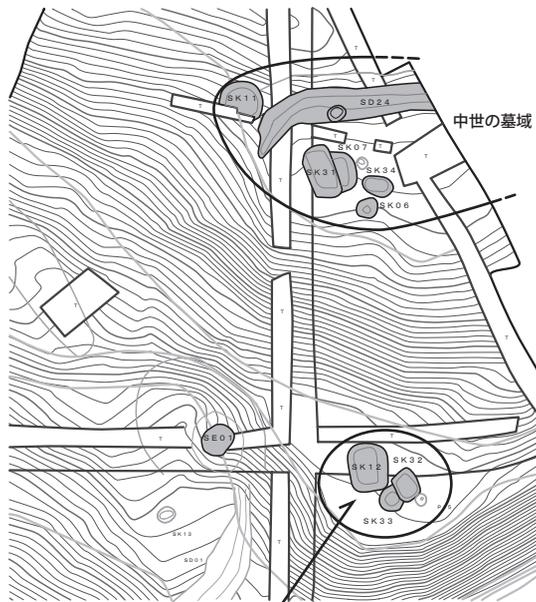
C区 SK21出土状況



D区 手水鉢出土状況



C区 礎板

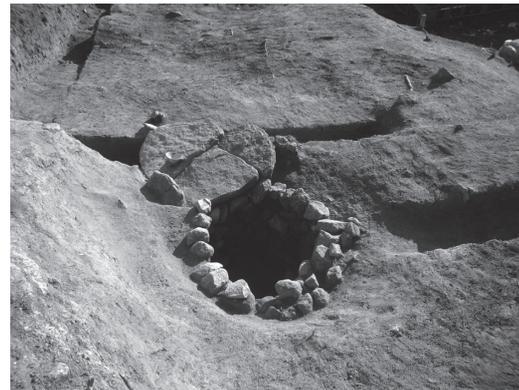


近世前半の墓域

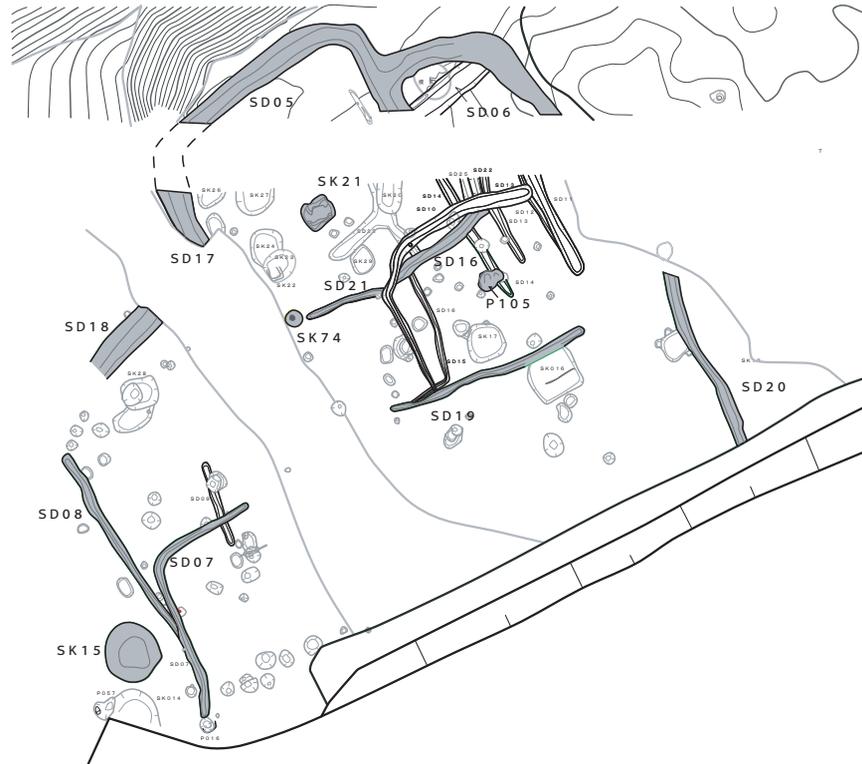
B区の主な遺構 (1:200)



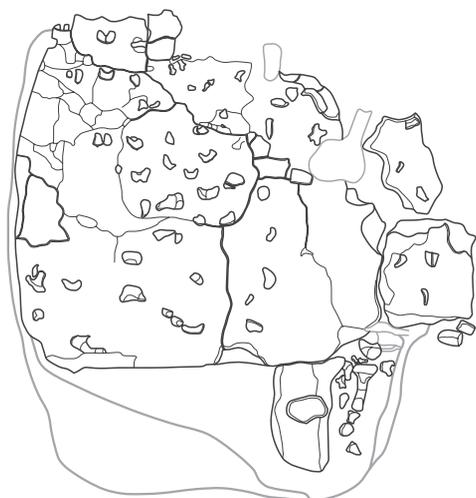
B区土坑墓半裁状況



B区 SE01



C区の主な遺構 (1:200)



SY01窯体部分 (1:40)



E区SY01 検出状況



E区 SB01



E区 作業場出土状況